名古屋港ガーデンふ頭

写真上 2 枚は、名古屋港管理組合「ガーデンふ頭再開発基本計画（中間取りまとめ）」から。名古屋港を北から望むと、その全貌を見ることができる。ガーデンふ頭は、名古屋港のほぼ中央に位置する。

ガーデンふ頭の陸域の広さは 22.6 万㎡で、ナゴヤドーム 4.7 個分の大きさ。西側には、年間約 200 万人が訪れる名古屋港水族館をはじめとして、JETTY、南極観測船ふじなどの施設があり、ふ頭内では、各種のイベントが開催される。毎年「海の日名古屋みなと祭」の花火大会には、ふ頭はごった返す。

名古屋港を一望しようと、久しぶりにポートビル展望室に行った。朝一番だったので、展望室を一人占めできた。写真とは違って、実際にこの目で見る名古屋港や名古屋のまちに吸い寄せられる。

とりわけ注目したのが、3 枚目の写真だ。レポート「山崎川をゆく」を 6 回連載したが、これが最も河口にあたる。河口から 3 つ目の橋が「道徳橋」だ。そこから河口の方を撮った。山崎川と左に伸びる堀川の間の土地が、伊勢湾台風で甚大な被害を受けた「道徳」地区だ。

中間取りまとめを読んで、気になったことが。「名古屋港イタリア村」について書かれていないことだ。もう忘れられた存在かもしれない。

でも、忘れてはいけないのでは。ガーデンふ頭東側の倉庫跡地に造られたイタリア村は、名古屋港管理組合も関わった PFI 事業のはずだ。愛知万博が開催された 2005 年に開村し、当初は年間 420 万人の入場者があったという。それが 2008 年には、入場者が半減し、170 億円の負債を抱えて経営破たんした。

イタリア村の経営破たんをしっかりと「総括」しないと、ガーデンふ頭の再開発計画も同じ過ちを繰り返すのではないか。名古屋港金城ふ頭との「棲み分け」も課題となる。金城ふ頭の「レゴランド」は、早くも苦戦が報じられている。中間取りまとめに「意見」したが、今後も名古屋港を注視していきたい。

（2017 年 7 月 21 日）